

騰々任運の系譜

—良寛禪師の境涯—

蔭木英雄

寛政二年（一七九〇）冬、大愚良寛が師の大忍国仙から、次の印可の偈を授かったことはよく知られている。

① 良也如愚道転寛 騰々任運得誰看 為付山形爛藤杖 到処壁間午睡閑

よし、良寛は愚か者のようだが仏道は次第にゆつたりと身につけている ゆつたりと自然法爾に任せているお前おまえの境涯は誰も窺い知る事は出来ぬ それでは山から伐り出したばかりの輝く藤の杖を付与しよう この杖について到着した所では壁にもたれて昼寝をするがよいぞ

「子を見ること親に如かず」と言うが、大忍和尚は良寛の禅境を、騰々任運（以下、傍点は全て筆者）の語でズバリ言い表している。東郷豊治編著『良寛全集』を繙くと、この騰々が十四首に、任運が三首に見られ、良寛禪師もこの語を尊重して頻用していたことが知り得る。

筆者は禅体験を持たないのに三十年來、禅文学の黒豆を拵じて（文字を穿鑿して）きた。禅は「言語道断・文字性空」というように、言語的分別を排するのであるが、筆者は文字禅をライフワークに背負った宿業を密かに喜んでいたのである。閑話休題、以下、騰々任運の語に表出された先人の心を追究することによって、良寛禪師の禅境を明らかに、あわせて筆者自身の不騰々非任運なるものを照射してみたい。

任運の語は『華嚴経』『摩訶止観』などに見られるが、管見に入ったものを列举してみる。勿論、左以外にも用例は

多いであろう。

人名	生没	出典
道信	五八〇—六五一	楞伽師資記
馬祖道一	七九〇—七八八	馬祖録
圭峰宗密	七八〇—八四一	禪源諸詮集都序
寒山	不明 八〇〇頃活躍	寒山詩集
拾得	不明 八〇〇頃活躍	寒山詩集付
臨濟義玄	八〇六?—八六七	臨濟録
法眼文益	八八五—九五八	碧巖録
道元	一一〇〇—一二五三	正法眼蔵随聞記
鉄舟徳濟	? — 一三六六	永平広録
一休宗純	一三九四—一四八一	閻浮集
景徐周麟	一四四〇—一五一八	狂雲集 翰林葫蘆集

3 知色空故、生即不生。若了此意、乃可隨時、著衣喫飯、長養聖胎、任運過時。更有何事。

この世の現象が空であることを知っているから、生成はとりもなおさず生じないことである。もしこのことを了解すると、その時々衣服を着たり飯を食ったりして、聖なる仏性をはぐくみ続け、任運に日時を過すことが

中国禪四祖の道信は、

2 云何能得悟解法相、心得明淨。信曰、亦不念仏、亦不捉心、亦不計心、亦不思惟、亦不觀行、亦不散乱、直任運。

ある僧が「どうすれば仏法の実相を了解することが出来て、自分の心を明るく清浄にすることが出来ますか」と問うと、道信は、「仏陀を思うことなく、心を捉えず、心を見守らず、分別的思考をめぐらさず、觀察することもなく、心を乱すこともなく、ただ任運にすることだ」と答えた。

問、臨時作若為觀行。信曰、直須任運。

ある僧が質問した、「時にのぞんで修行するのに、どのように觀察し実践すればよろしいでしょうか。」道信が言った、「まったく任運にしなければならぬ」。

ある。いや、修行法と構えることも否定する「あるがまま」という意味であろう。この『楞伽師資記』に用いられる任運は、仏道修行法を示す語である。

出来る。それ以外に一体何があるのか。

『馬祖道一禪師語録』に収められるこの文章は、色即是空を悟了した後の、現実日常生活を任運の語で表現しているのである。平常心是道を言っているのであろう。次の④の冒頭の、道即是心は平常心是道の裏がえしの表現である。

華嚴宗五祖の圭峰宗密は華嚴教と禪との一致、即ち教禪一致を主唱した人として知られており、彼の言葉に、

④ 道即是心、不可將心還修於心。惡亦是心、不可將心還斷於心。不斷不修、任運自在、方名解脫。

仏道とはとりもなおさず我々の心である(一切衆生悉有仏性)。だから心で心を修行してはならぬ。悪心も同じく心であるから、自分の心で悪心を断つことは出来ぬ。心を断滅することも心を修行することもしないで、任運自在なのを、まさに解脫というのである。

とあり、断滅や修行のはからいを捨てた、解脫の状態を任運と述べている。

⑤ 一住寒山万事休 更無雜念掛心頭 閑於石壁題詩句 任運還同不繫舟

一たび寒山に住んでからすべて放念してやめたので もはや雜念が心にかかることは無い 心の趣くまま石壁に詩を書きつける この任運の暮らしはとも綱のはずれた舟と同じだ

この寒山の結句は、拾得の結句と全く同じであり、任運が不羈自由の意を含むことを示している。これと同じ譬喩は良寛詩にも見られるのである。(良寛詩は作品番号を○で囲む)

⑥ 天氣稍和調 飛錫作春游 溪間水涓々 山林鳥啾々 或伴僧侶往 復投友人休 生涯何所似

汎彼不繫舟

天候はやつとうららかになり 杖をついて春の野に出かけた 谷川はさらさら流れ 山林で鳥がびつびつと鳴いている 時には僧と一緒に歩き また友人宅で一休みする この自分の生涯は何に似ているのか (あの寒山詩のように) 繫がれずに浮かぶ舟のようだ

良寛詩集には「題寒山拾得贊」があり、「静読寒山詩」の句があり、「吾家寒山詩 勝於談経卷」という、殆んど寒山詩そのままの作品もあつて、良寛は相当寒山詩に傾倒している。良寛はさらに、「夫人之在世 汎如水上蘋」（秋日与天華上人遊靈崎）⁽⁴⁾、「人生一百年 汎若秋水蘋」というように、任運の生涯を水上の浮草に喩えるのである。なお⑥の頷聯は蘇東坡の有名な、「溪声便是広長舌」（谷川のせせらぎの音は釈尊の説法の声である）をふまえて読むべきことは論をまたない。

⑦ 但能随縁消旧業、任運著衣裳、要行即行、要坐即坐。無一念心希求仏果。

ひたすらに因縁にまかせて過去の業を消して、任運に衣服を着て、行こうと思えば行き、坐ろうと思えば坐る。仏果を願ひ求める心など全くない。

臨済義玄のいう右の任運は、仏道修行の結果、つまり悟りを求めるはからいがなく、ありのままの自由な生活態度をいう。しかしそれは、単純なありのままではなく、因縁に従つた自由なのである。良寛詩の「此生何所似 騰々且任縁」の句が端的にそれを証明する。任運イコール任縁なのである。因縁にまかすことである。仏教の根本は言うまでもなく十二因縁を明らかにすることである。臨済禪師にあつては、任運は仏教の根源につながる言葉であり、それは衣服を着、飯を食うという何の変哲もない生活そのものである。良寛が、時に衣鉢を着けて市朝に下り 展転飲食此の身に供す」と自己の生活を詠ずるのも、任運の境涯を表わしているのであろう。「法華讚」の法師品で、

⑧ 空為座兮慈為室 任運挂著忍辱衣 從容哮吼無畏説 栴檀林中獅子兒

空寂を坐にし慈悲を室にし 任運に袈裟を着る ゆつたり落ちついて仏の四無畏説(正等寛無畏、漏水尽無畏、説障法無畏、説出道無畏)を叫ぶのは 香り高い栴檀の木の本(仏教界)の中の釈尊である

と詠じ、良寛は単なる衣服ではなく、忍辱衣を着ける状態を任運と表現している。これは『法華経』法師品第十の、若人説此経 応入如来室 著於如来衣 而坐如来座 処衆無所畏 広為分別説 大慈悲為室 柔和忍辱衣

諸法空為座。 処此為説法

に拠っているのである。

⑨ 理極忘情謂 如何有喩齊 到頭霜夜月 任運落前溪 菓熟兼猿重 山長似路迷 拳頭殘照在

元是住居西

真理の究極では情感も言葉もなくなり 何にも譬えられない (あえて譬えようと) 頭にあつた霜夜の月が

任運に前の谷に沈むようなものだ 柿が熟すと猿が取りに来て枝がしなない 山又山で路に迷うような

ものだ(ありのままだ) ふと頭を上げるとまだ夕日が輝いていて それはいつもわが家の西にある(この

ままで何の変哲もない)

これは『碧巖録』三十四則と九十則に収められている、法眼文益の「円空美性頌」(森羅万象がそのまま諸法実相、真理の現れであるといううた)である。法眼宗々祖の用いる任運は、大宇宙森羅万象の自然の摂理を意味すると言えよう。

次の道元の上堂法語の任運も同じ用法と考えられる。②④とも共通)

⑩ 近来空手還郷。所以山僧無佛法。任運且延時、朝々日東出、夜々月落西。(『永平広録』卷一)

先年、私は経典も仏具も持たず手ぶらで故国に帰ってきた。だから私には仏法など無い。任運に時を過こしているにすぎぬ。毎朝太陽は東から昇り、夜ごとに月は西に沈む。

室町時代の禅僧もよく任運の語を用いている。三例だけ示しておこう。

鉄舟徳済は夢窓疎石の法嗣で、画蘭の名手であった。渡元して蘆山円通寺で修行し、元の順宗から円通大師の号を賜わり、自ら百拙と号した。備中玉島の円通寺で修行した大愚良寛に通じる所があつて、興味深い。「絶学」という道号頌に次のような作がある。

⑪ 禅不参兮書不読 従来任運貴天真⁽⁵⁾ 一靈心性是非外⁽⁶⁾ 誰識無為閑道人⁽⁷⁾

(絶学道人は) 参禅もせず読書もせず　これまで任運に過ごしてありのままの自性を尊んでいる　人々本具の仏性は是非善悪の相対的分別を超越しているのだから　誰も知識では絶学無為の閑道人は理解できぬ
 絶学という道号を与えられた修行僧が、まさか無為の閑道人の境地に達していたのではあるまい。興味深いのは[4]の文章の前に、

了此天真自然、故不可起心修道。

この天真自然の道を悟了しているゆえ、わざわざ心を費して仏道を修行してはならぬ。

という一文があり、天真と任運と同じ文脈で用いていることである。天真は良寛詩でも、『生涯懶立身　騰々任天真』と吟じられており、良寛の父、山本以南の追悼句集『天真仏』に、『天真仏の告によりて桂川のながれに以南をすつ』という文があることに留意したい。

次に風狂の禅僧、一休宗純の「面壁達磨」を読んでみよう。

[12] 誰人任運問安心　昔日神光侍少林　面壁功成無面目　不知積雪滿庭深

誰が任運に安心立命を問うたのか　それは昔慧可が少林寺で達磨に参侍した時である　達磨は面壁九年の

甲斐あつて「本来の面目」も超越し　雪が一ぱい庭に積もっている(その中を慧可が道を求めて訪ねて来た)

のを知らなかつた

この任運を平野宗浄氏は「はからいを捨てて」と解し、柳田聖山氏は「だしぬけに」「自然にさりげなく」と訳している⁽⁸⁾、苦心が窺える。これまで筆者があげて来た用例に従えば、「慧可が求道というはからいを捨てて、安心を質問するのは大自然の摂理であるのに、誰もそれをしなかつた」ということになる。無面目、不知の二つの否定詞は、絶対的肯定、つまり因縁の仏理に随った三千大千世界の、摂理のありのままを示しているのである。

景徐周麟は、「逸溪」という道号頌で、

13 昔日唐朝數六人 猶言開府独清新 謂看夜々霜天月 任運前山掛一輪

昔唐代に李白たち竹溪の六逸がいたが、やはり(杜甫が「春日憶李白」で吟じたように) 夷開府だけが清新だ
 った(逸溪の詩も清新だ) 見てごらん夜毎の霜空の月が 任運に前の山に沈んでいくのを

この転結句は9の領聯と殆んど同じで、『碧巖録』四十則の雪竇重頭の頌「霜天月落夜將半 誰共澄潭照影寒」を踏まえている。

以上の用例を念頭に置けば、14の大愚良寛の詩境は凡俗の筆者の眼を開かしめる。

- 14 一たび出家してより 任運に日子を消す 昨日は青山に住し 今朝は城市に遊ぶ 衲衣百余結 一鉢幾載
 なるかを知らんや 錫に倚つて清夜に吟じ 席を鋪いて日裡に睡る 誰か道う数に入らずと 伊余が身即ち
 是

下手な口語訳は蛇足になるだろう。

達磨	三四六?—四九五?	二入四行論
寒山	不明 八〇〇ごろ	寒山詩
白居易	七七二—八四六	白氏長慶集
趙州從諗	七七八—八九七	趙州録
布袋	? — 九一六	景德伝燈録
宏智正覺	一〇九—一一五七	從容録
虚堂智愚	一一八五—一二六九	虚堂録
道元	一二〇〇—一二五三	永平広録

騰々の語意は『大漢和辞典』に、1盛におこるさま 2鼓をうつ音 3穏やかなさま、と記す。これでは良寛詩は解せない。管見に入つた用例を列挙してみると上表のようになる。

- 15 若用法仏修道者、心如石頭、冥々不覺不知、不分別、一切騰々如痴人。何以故、法無覺知故。(二入四行論)

もし法身の立場で修行するなら、心は石ころのように知覚せず、分別せず、すべて騰々と愚者のようにせよ。な

ぜなら真理は人間の覚知を超越しているからである。

周知のごとく、漢語では騰々のような疊語は、ぐうぐう 軒をかく、うつらうつら 眠ると同じく、擬声擬態に多く用いる。初唐の頃、達磨の語録として流布した『二入四行論』では、(1)分別知覚を超越した(2)痴人の如き状態を騰々と言っている。白居易の「東院」では、

⑩ 松下軒廊竹下房 暖簾晴日滿繩牀 浄名居士經三卷 栄啓先生琴一張 老去齒衰嫌橘醋 病来肺

渴覚茶香 有時間酌無人伴 独自騰々入醉郷

(我が東院は)松のそばに廊下があり竹の下に部屋があつて 暖かい日ざしが簾の繩床にさし込む (私は)

維摩經三卷を繙き 栄啓期のように琴を弾いて楽しむ 老いると齒はがたがたで蜜柑のすっぱいのがいや
で 病気になることから咳が出て茶の香りが欲しくなる 時には独りで静かに酒を酌み 自分一人騰々と

して酔いしれる

と(3)誰にも煩わされぬ酔心地を表現している。

⑪ 騰々大道者 対面涅槃門 但坐念無際 来年春又春

仏法の大道に騰々たる者は 悟りの門に直対している ただ結跏趺坐するだけではてしなく正念正想で

来る年も来る年も春また春(も正念正想の涅槃の境地である)

この趙州從諗の騰々も、(1)分別知覚を超越して(2)何ものにも束縛されず、大道を進む状態を表している。良寛禪師が、

⑫ 自出白華老衲会 騰々兀々送此身 一枝烏藤長相隨 七斤布衫破若烟 幽窓聞雨草庵夜 大道打

毬百花春 前途有客若相問 我是昇平一閑人

白華山円通寺の大忍老師の会下を出てから 騰々と不動の坐禪で日々を過した 一本の杖 (1)の山形爛藤
杖)は私にいつも随い 四kgの衣は煙のようにほろほろ 夜は草庵の静かな窓辺で(鏡清雨滴声の公案を拈
じつ)雨の音を聞き 春の日は(大道無門の)広い道で毬をつく 行き先で私のことを尋ねる者がいたら
「太平の世の一閑人」と答えよう

兀々は(17)の但坐に通じ、大道、春の用語も趙州と良寛とは共通する。「永平広録」を繙くと、春信通和 界芳徧東君
兀々坐雲堂(卷二)、「脱落心身兀々 猶如無手行卷(卷五)」、僧問、「兀々地思量什麼」。(葉)山曰、「思量箇不思量」
(卷五)のように、兀々という疊語は、不動の只管打坐や、不思量底を思量する状態を示し、騰々と併用されている。
もう二首良寛詩、

19 黄鳥何関々 麗日正遲々 端坐高堂上 春心自不持 携彼囊与錫 騰々隨道之

鶯は何と美しく囀り 春の日は全くうらうらとのどか 高堂で坐っていると 春の気分でじつとしてお
れぬ いつもの頭陀袋と錫杖を手に 騰々と道のままに出かける

20 裙子短兮褌衫長 騰々兀々只麼過 陌上兒童忽見我 拍手齊唱放毬歌

腰衣は短く肩衣は長くちぐはぐで 騰々と不思議に日々を過す あぜ道の子供がすぐ私を見つけて
手を打ち声をそろえて手毬歌を唱う

良寛にとつては、高堂の端坐も、春の日の外出や毬つきも、みな大道に随うものであつた。このように読んでくると、
騰々にどういふ口語訳を付けたらよいか、はたと困ってしまう。喉元まで出かかっているのだが、言語にならぬ。ま
さに説似一物即不中である。しかし言語文化研究を宿業としている筆者は、このまま投げ出すわけにはいかぬ。「景德
伝燈録」の布袋和尚の歌と、「從容録」の頌から帰納しよう。

21 只箇心心是仏 十方世界最靈物 縦横妙用可憐生 一切不如心真実 騰々自在無所為 閑々究

竟出家兒 若親目前真大道。 不見纖毫也太奇 (後略)

ただ此の心だけが仏であつて 心は十方世界で一番靈妙なものだ 自由自在のすぐれた働きは全く感歎すべきもので 一切のものは心の真実には及ばぬ 心は騰々とし自在でしかも無為自然で 静かてゆつたりしているのは結局出家者だ もし目前の真の大道を見て 些細なものを見て執らわれないならまた大それうすばらしい (後略)

22 跛々撃々毳々毳々 百不可取一無所堪 黙々自知田地穩 騰々誰謂肚皮愁 善周法界渾成飯 鼻

孔纍垂信飽參

(南泉普願は) 足なえ手なえで髪はばさばさ 百のうち一も取るべきものがない (しかし) 黙々として心が平穩無事なのを自分で知つていて 騰々としていても誰も愚か者とは言わぬ 普ねく尽十方法界を飯のように腹に収め だらりと垂れた鼻の穴から長い息をして満ち足りている

十二因縁の大道に随つて(つまり只管打坐して)、自由自在無為自然で、外見は愚か者に見える状態が騰々で、¹⁵¹⁶¹⁷で分析した(1)(2)(3)に合致する。長谷川洋三氏は苦心の結果、「ゆつたり」という訳語に辿り着いている。¹⁹ 日本語の限界を考えれば、筆者も一応長谷川説に従わざるを得ず、良寛詩を提示して後考を挨とう。

23 自從一出家 不知幾箇春 一衲与一鉢 騰々送此身 昨日住山林 今日遊城闈 人生一百年 汎若秋水蘋 (後略)

一たび出家してから 何年たったことやら 衣一枚と鉢一つで ゆつたりと日々を暮らす 昨日は山林に住み 今日町なか遊び 人生百年は 秋の川面の浮草のようなもの (後略)

吟じ来り詠み去れば⁵⁶¹⁴と同工異曲で、騰々と任運の語は同心円のように重なる。

騰々[◎]任運[◎]の四字熟語を用いている禪籍は、次のようなものが管見に入った。¹¹⁾

騰々と和尚	不明	七〇〇ごろ	景德伝燈録
黄檗希運	七七〇?—八五〇?		伝心法要
友山士徳	一三〇—一三七〇		友山録
天境盡致	一三〇—一三八一		無規矩
天祥一麟	一三二九—一四〇七		天祥和尚語録
絶海中津	一三三六—一四〇二		絶海和尚語録

福先仁俊は嵩山の慧安国師(五八二—七〇九)に参問したあと、城外の山野で放曠していたので、時人は騰々と和尚と称した。天册万歳(六九五)に則天武后が宮中に召したが黙して語らず、翌日短歌十九首を献じた。そのうちの一首が次の「了元歌」である。不語で導けない者(則天武后)を偈頌で教えたわけで、騰々と和尚の自在の方便を示すものとして『禅苑蒙求』に伝えられている。百三十二字の長歌なので、始めと終りだけをあげる。

[24] 修道道無可修 問法法無可問 迷人不了色空 悟者本無逆順 八万四千法門 至理不離方寸

(中略) 今日任運騰々と 明日騰々と任運 心中了々総知 且作伴癡縛鈍

仏道を修行するのに修得しなければならぬものは無く 仏法を問うとしても問うべきものは何も無い
迷いの人は色即是空を了解せず 悟った者は本来順境逆境など無くして自由自在である 仏陀が一代に説いた八万四千の法門の 究極の真理は心以外には無い (中略) 今日三千大千世界の因縁に随ってゆつたりとし 明日も大宇宙の摂理の中で(坐禅して)自在に暮す 心中一切の妄執分別を絶って明日に真理を知り
その上で愚鈍不自由のふりをする

北越の沙門良寛も、越後の人々に一字の法も説かずに詩偈を書き与えて暮らし、

②⑤ 十字街頭乞食了 八幡宮辺方徘徊 兒童相見共相語 去年癡僧今又来

町の中で乞食鉢鉢行をすませ 八幡宮のあたりをうろつく 子供達は見て口々に
年も来たぞ」としゃべりたてる 「去年の馬鹿坊主が今

と佯癡者になつていたのだつた。黄檗希運も、

[26] 如今但一切時中、行住坐臥、但学無心。亦無分別、亦無依倚、亦無住著、終日任運騰々、如癡人相似。

いま大事なことは、あらゆる時、日常の行住坐臥の一つ一つに無心を学ぶことだ。分別することなく、ものに頼らず、執着せず、一日中ゆつたりとし、まるで愚者のように生きてゆくことが大切だ。

と愚鈍の日々を過ごせと教える。

友山士偈は二十八歳で渡元し、十七年間中国大陸の禪を学び、帰朝するや臨川寺、東福寺の住持となつた。

[27] 結夏小參。若論正因一字也無。老宿舌頭拖地且在者裏、商量兩錯西院。停因長智、争似慧峰者裏、騰々任運、任運騰々、兵杖不用自然太平。有時酒肆茶坊隨緣混入、有時魚行肉店信脚經行。何故如此、竹葉掃階塵不動、月穿漂底水無痕。

夏安居の結制時の小説法。もし悟りへの道を論ずるなら一字の言語も不要じゃ。わしの舌は地に投げ捨てたが、しばらくはここに在つて、西院思明の兩錯の機縁を考えてみたい。停因長智（意味不明）はどうして東福寺の、ゆつたりとして、武器を用いずに太平なのに及び得よう。時には酒場や茶店に因縁に随つてまぎれ込み、時には魚肉店に足にまかせて出かけて行く。どうしてこうなのか、それは「竹の葉が階段を掃いてもほこりが立たず、月光が川底にさし込んでも水に痕跡が残らない」と同じじゃ。

力量不足で下手な口語訳をつけてしまったが、東福寺の修行僧に、騰々任運の禪風を教えているのである。良寛が、「次第に乞食す西又東 酒肆魚行も什麼ぞ論ぜん」（托鉢）と吟ずるのも、[27]の傍線の語を読み合わすれば騰々任運の境地を吟じているのである。

天境靈致は元から来日した清拙正澄の法嗣で、五山最高の南禅寺住持から播磨法雲寺に転じた高僧である。この人の「自贊」を読む。

28 此老雷堆 全無見解 耳辺不聞 毀譽音声 胸中不立 物我境界 騰々任運 生涯 流水閑雲 心自在 有

時掀翻海嶽 納之毛端 或復捏定乾坤 擲於方外 蓋是從無見解中 流出將來 以為尋常受用 三昧而已矣

この老いばれば 自分の意見など全く無いわい 耳に毀譽の聲は聞かぬし 胸に物我の相対的世界は無いぞ
ゆつたりした生涯で 流水や閑雲のように自由自在の心じゃ ある時は海や山をひるがえして毛の端に入れ
たり あるいは天地をこねくりまわして 俗世のかたに放り投げる つまりこれは無見解から流れ出たのじ
や 考えてみるとふだんのありのままの働きに過ぎんわい

天境和尚の言う通り、騰々任運の生涯はただの自受用三昧なのである。しかし、これが仲々むつかしい。

義堂周信と共に「五山文学の双璧」と並称された絶海中津の「自贊」にも、任運騰々の語が見える。

29 靈龜背上卦文露 判得生涯西又東 任運騰々胡乱過 鉢孟有口噓虚空 噓虚空吐出 陳年栗棘蓬

靈妙な龜の背に八卦のもとになった九つの模様が露われ（靈龜山天龍寺で拙僧は悟得し） 生涯西すべきか東
すべきか判断することが出来た （その為）ゆつたりと分別知を働かさずにでたらめに日を過ごし 鉄鉢に
口があつて虚空をくらう（その逆に、鉢で食物をたべて真理を体得する） 虚空を喰うと吐き出すのは 昔
の古い栗のいがだ（栗棘蓬は何としても呑みこめない難透の公案）

絶海和尚の後半は、逆説的表現によつて自己の境涯を示しているが、良寛禪師はもつと素直である。但し、次の『法華讚』の方便品30の只麼過は、29の胡乱過に重なる。

30 騰々任運只麼過 因来眠食来餒 唯此一事也不要 不知何処度

わしは自由無礙にゆつたりと日々を過ごし 疲れると眠り食物があればくらう 此の事だけで外に何も必
要とせず 自分が彼岸に渡ることや衆生を濟度することなどに関心はない

〔29〕と〔30〕の傍線は単なる裏がえしの表現ではない。まさに乾と坤に懸隔する二人の仏教人格を直截に表わしている。極言するなら、任運騰々の語は絶海には適わしくなく、大愚良寛の七十三年の生涯を象徴する四字である。(これも俗人のたわ言であらうが)

註

- (1) 『大方広仏華嚴經』に、第八不動地菩薩、以無功用智、於一微塵中轉大法輪。於一切時中行住坐臥、不拘得失任運流入薩婆若海。とあり、『摩訶止観』卷三下に、久植善根今生雖不聞円教、了因之毒任運自発。とある。(何れも「大正新修大藏經」による)
- (2) 本文では冗長になるので、註として拾得詩をあげておく。自笑老夫筋力敗 偏愛松巖愛独遊 可嘆住年至今日 任運還同不繫舟
- (3) この良寛の句は寒山詩の「家有寒山詩 勝汝看經卷」と殆んど同じである。
- (4) 良寛詩は題のある作品は少ない。
- (5) 黄檗希運の『伝心法要』(後出)に、天真自性本無迷悟とあり、永嘉玄覺の『証道歌』に本源自性天真仏とある。また、道元の『永平広録』巻八に、姪坊酒肆、豈非天真如来之講肆乎とある。
- (6) 『曹山録』に一真性、不仮胞胎時如何とある。
- (7) 『証道歌』の君不見、絶学無為閑道人、不除妄想不求真に拠る。
- (8) 平野宗浄『狂雲集全釈上』(春秋社)一四五頁。柳田聖山『大乘仏典26・一休・良寛』(中央公論社)八四頁。
- (9) 長谷川洋三『良寛禪師の真実相』(名著刊行会)三二三頁。
- (10) 表にあげながら、本文で取り上げなかった騰々の作品を付記しておく。

『寒山詩』隠士遁人間	多向山中眼	青蘿疎麓々	碧澗響聯々	騰々且安樂	悠々自清閑	免有染世事
心浄如白蓮						
『虚堂録』拳息冥方所	徒称宋地僧	百年応自癡	一飯若為憑	風暖斗山鵲	煙消露石稜	分甘雲水共

終日任騰々(動靜双照)

【永平広録】卷九 騰々了々又騰々

【永平公録】卷十 氣宇爽清山老秋

天上天下雲自水由(自贊)

(11)

表にあげながら本文に取り上げない騰々任運の作品をあげておく。

【友山録】下火法語「滿福和尚」八十六年依幻住

【無規矩】法雲寺上堂法語 利衰譏普

真如解脱菩提 涅槃之可求竟

【天祥和尚語録】建仁寺解制小參

行脚何関曲直繩 若欠大成方一寸

觀天井駟皓月浮 一無寄一不收

其知弥少二三升

任騰々粥足飯足

活繞々正尾正

頭

騰々任運實天真

譬如空華不可把握

流水浮雲無定跡

不拘者般羈絆

囉々哩唱無生曲

無煩惱業障顛倒

夜榻円蒲

亦能落得一場快活

今日正当平旦寅

妄想之可遠離

無

雖然恁麼

明朝已解

制。